

# 年度の重点目標の評価をいかにしたらよいか

—— 客観的評価をめざして ——

滝 波 忠 吉\*

この小論は、学校における年度の重点目標の評価について、評価試案を作成し、それを実践し考察することによって、客観的評価のあり方を考究することを目的としたものである。この目的のために教育目標の具体化について考え、具体化の構造を示したり、学級目標の具体化と評価について、小学校第3学年に例をとってその実際を示してある。

## I 主題設定の理由

- (1) 学校の教育目標は、理想的人間像をめざす教育活動の根本となるものであり、年度の重点目標・努力事項によって具体化がはかられる。この重点目標は、学年・学級化されたり、各教科・領域へ位置づけられることによって、日々の教育活動を支えている。
- (2) 重点目標達成の度合いは、学期末に評価・反省しているが、評価の観点が必ずしも明確になっていないために、総合的・印象的な評価に終わっているのが実情である。
- (3) この改善に当たっては、①客観的な評価基準を設けること。②評価基準はできるだけ具体的な行動や現実的な事実を明らかにし得るものであること。③評価基準はできるだけ簡単に弾力性があり、かつ、使用上の便宜が考慮されていることが必要とされている。
- (4) 重点目標の評価は学校評価につながるものであるが、林部一二氏は次のように述べている。<sup>1)</sup>「学校評価の今後の課題を考えると、まず指摘されることはその客観的評価法を確立し、学校評価を権威あらしめ、かつ、その有効性を高めることである。そのためには評価の基準をいかにして客観的に設定するかが問題となる。評価基準ないし評価尺度の設定、あるいはそのウェイトの決定には多くの困難が伴うのである。それらは窮極において教育目標に関する哲学的・社会的価値の認識に連なるものであるからである。そして、学校評価についての主観的な価値意識を客観的尺度に切りかえることは今後課題された最大の課題であろう。」

また、本県の昭和46年度学校教育実践上の努力点にも、「学校に即した具体的な評価の観点を設け日常の評価をたいせつにして実施する。」と述べられている。

以上のことから、客観化をめざした重点目標の評価を主題とすることは、意義のあることと考え、この主題を設定した。

\* 村上市立門前谷小学校教諭

## II 研究のねらい及び方法

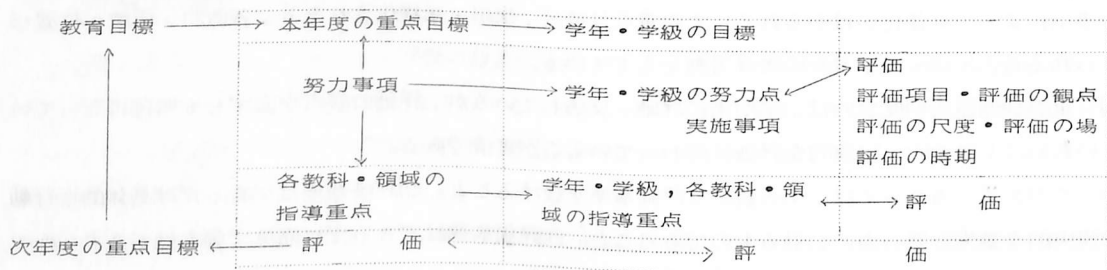
○ 年度の重点目標がどの程度達成されたかを知るために、児童ひとりひとりの変容の過程・進歩の度合いを客観的に評価するには、どのようにしたらよいかを明らかにする。

- (1) 評価に関する文献と資料を参考にして、本校重点目標の学年・学級化を評価にウエイトをおいて再検討する。
- (2) 本校における学年・学級の目標評価項目・評価方法を再検討して評価試案を作成する。
- (3) 試案に従って実践し、その結果を考察する。

## III 研究の内容

### 1 教育目標の具体化

重点目標の評価にかぎらず、評価すべてについていえることであるが、「何を評価するのか」という評価対象を分析することが手順の第一となる。<sup>2)</sup>この場合、重点目標の評価という特殊性から、教育目標の具体化までさかのぼり、具体化の構想を明確にしなければ、評価項目・評価の観点を設定することはできないと考えた。紙面の制約はあるが、あえて、ここに具体化の図を示すと下図のようになる。



(図1) 教育目標の具体化の構造

### 2 評価試案

#### (1) 教育目標と本年度の重点目標

具体的評価試案を示すには、教育目標・年度の重点目標を示す必要があるので、以下に略述する。

##### ① 本校の教育目標

◎ 豊かな情操をもちたくましく伸びる子ども。

○ 意欲的に学習し、創意工夫する子ども。

○ 力を合わせて楽しい学校生活をきずく子ども。

○ 体力の向上と気力の充実に努める子ども。

##### ② 本校の本年度の重点目標

○ 自分の考えをはっきりさせ、進んで発表しよう。<sup>(ア)</sup>

○ 身のまわりに問題をみつけ、力を合わせて生活をよくしよう。<sup>(イ)</sup>

○ 常にからだをきれいにし、よく運動して丈夫なからだにきたえよう。<sup>(ウ)</sup>

## (2) 第3学年の学級教育目標と評価試案

重点目標は、教育目標実現にむかって、その年度何をどこまで達成させるかという性質をもつものであるから、学年段階の順次性を追って学年教育目標、学級教育目標に具体化していく必要がある。

このことは、学級の経営をある程度規制するものであるが、個性のある学級経営を認めないことにはならない。このことについて深く述べることはできないが、学級教育目標の具現化について、本校では学級経営案を作成して実践している。それには、学習指導・生活指導・特別活動・健康指導・その他(家庭との連携など)の5項目について、学級の努力点と実施事項、評価の観点の3つが明記してある。

項目について、大きくは、学習指導と生活指導であろうが、本校では、前述の重点目標を見てもわかる通り、特別活動と健康指導も特にとり出して力をいれているので、特別活動と健康指導の2項を設けたわけである。これらのことをふまえて、第3学年の学級教育目標及び評価試案を示す次のようになる。

(学級の教育目標) 自分の考えをまとめ、話し方のルールにしたがって発表しよう。  
 なおすところを見つけ、力を合わせてよくしよう。  
 からだをせいけつしよう グループで楽しく運動しよう。

(表1)

評 価 試 案

項目	学級の努力点	評価項目	評価の観点	評価方法
学 習 指 導	○ 教師の働きかけから学習問題をみつけさせる。	問題意識から具体的問題を把握する能力。	○ 時間のねらいにそくした学習問題をつかむことができたか。	は握した問題を記述させ、教師が評価する。 ・2ヶ月ごとに。
	○ 自分の考えたことを理由をつけてノートさせる。	筋道を立てて考える能力。	○ 既習経験を利用して予想を立てようとしているか。	チェックリスト。または評定尺度法。
	○ 要点をおさえて、わかりやすく発表させる。	まとまりのある発表能力。発表態度。	○ 児童が自分の考えを内容として、発表のパターンにそって発表したか。	評定尺度法。 児童の相互評価。
生 活 指 導	○ 放課後、ルールを守って運動させる。	きまりを守って運動する態度。	○ 時間・場所のきまりを守ったか。 ○ ルールに従って遊んだか。	ゲスフーテスト。 ・年2回。
	○ いろいろな児童とグループを作らせて、仲よくさせる。	だれとでも仲よくする態度。	○ ひとりぼっちでなかったか。	自己評価。
	○ 遊びを通して、したいことや言いたいことを遠慮なく出すようにさせる。	いきいきと活発に遊ぶ態度。	○ 遊び相手が限定されていないか。 ○ ぼんやりしていないでよく遊んだか。 ○ 全身で動きの大きい遊びができたか。	自己診断テスト。 教師の観察。 評定尺度法により、2ヶ月ごと。
特別活動				
健康指導				

(注) 特別活動、健康指導については、紙面がないので省略する。

### 3 評価の実際

#### (1) 学習指導の評価……「教師の働きかけから学習問題を見つけさせる」ことの評価

前述の評価試案(表1)に関連して、評価の実際を述べる。

客観的に評価する1つの方法として、ある期間を定めて何回か評価し、その累積結果から数量化する場合が考えられる。これは、近代評価の特質ともいわれている。評価試案の評価の観点に「時間のねらいにそくした学習問題をつかむことができたか」とあるが、これは、この方法で客観的评价ができる。

A……ねらいにそくした学習問題をつかむことができた。

B……学習問題をつかむことがあまり適切でない。

C……学習問題をつかむことができない。

このような3段階の評定尺度を設け、これに対する学級児童の百分率を出しておく。期間を、たとえば、5月・7月・10月・12月・2月のように定め、期間ごとに出したパーセンテージをもとに年度の評価をするのである。5月の評価は、その学級の年度はじめの実態とみてよいであろう。教師の働きかけの適否・内容の難易などによる違いもあろうが、一応その実態から、到達目標を定め(たとえば、Aを年度末までに30%増加させる。)それにいくら近づいたかを年度の評価とするわけである。

A・B・Cの決め方については、教師の主観がはいるようにも思われるが、「時間のねらいにそった学習問題」ということになれば、そこに、すでに基準があるから客観的评价が可能なのはである。

第3学年の理科に例をとってみる。

#### ① 5月 単元 「かがみと日光」

本時のねらい 鏡のむき(傾き)や位置を変えると、はね返る光の向きが変わり光の映る位置も変わる。

Aとするものの記入例とパーセンテージ (記入例の漢字は執筆者が訂正使用。以下同じ。)

- 太陽の光を鏡がはね返しています。その鏡をどのように動かしたら、光の映る場所が変わるでしょう。
- 鏡を動かすと、鏡からはね返った光はどこへ映るでしょう。 (27%)

Bとするものの記入例とパーセンテージ

- 鏡がかわると光はどこへ映るでしょう。 (60%)
- 手で鏡を動かすとどうでしょう。

Cとするものの記入例とパーセンテージ

- 太陽が動くから変わります。 (13%)

#### ② 10月 単元 「空気と水」 (注) 7月単元は紙面がないので省略する。

本時のねらい 空気でっぽうをよくとばすには、きつい玉が2個必要である。それは、2個の玉の間の空気を押し縮めるためである。

Aとするものの記入例とパーセンテージ

- 大きい玉を2個使うとはんとうに空気が縮まるか。小さいのだと縮まっても空気がもれるかどうか。 (40%)

Bとするものの記入例とパーセンテージ

- 玉の大きさでとび方も違うでしょうか。とばないのをとばすにはどうしたらよいか。(53%)

Cとするものの記入例とパーセンテージ

- 高くあげても少し前へいくかどうか調べる。(7%)

(注) 執筆現在11月のため12月単元は記載不能。

この百分率を、表あるいはグラフに表わすことによって、学習問題のは握については年度の数量化された評価が可能となる。本校では、年度の重点目標については、主として理科を通して達成しよう、と努力事項に定めたので、理科に例をとったが、他教科についても同様にしてできるであろう。

(2) 「要点をおさえて、わかりやすく発表させる」ことの評価

能力・態度の評価は、知識・理解・技能の評価と別個に存在するものではなく、ある部面をとらえて評価するにすぎない。態度の評価は児童の具体的事実や行動によって評価する以外にはないのである。

これを数量的に評価するには、評定尺度をいかに客観化するかによって決まってくるものと思われる。

次に示す例は、客観的に評価する第2の方法であろう。(第1の方法は、Ⅲ・3・(1)に述べてある)

発表能力評価の評定尺度を示すと、 A... 発表内容に既習経験が多く使われている場合。

右のようになる。

B... 発表内容に既習経験がやや多く使われている場合。

C... 発表内容に既習経験がほとんど使われていない場合。

ここで既習経験とは、大きくは前学年までの学習内容であり、小さくはその学年あるいは単元・題材等における内容をさしている。生活経験は一応除いておく。A・B・Cと判定する立場は、「〇年生の勉強で………」 「〇〇〇(単元名・題材等)の勉強の時………」といった発表のあった場合に限って既習経験を用いたとするのである。児童にとってはむずかしいようであるが、発表の訓練によっては可能なことと考えられる。これは、教師が評価する。

また、発表態度もあわせて評価する立場から、これの評定尺度を示すと次のようになる。

5...正しいと思ったら、はなたいされても、がんばって言いぬく。

4...正しいと思ったら、はなたいされても言う。

3...正しいと思っても、にんきのある人やえらい人にはなたいされると、だまってしまう。

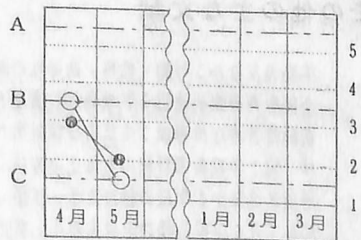
2...正しいと思っても、ひとにはなたいされると、だまってしまう。

1...正しいと思っても、発表しない。

この評定尺度によって、児童による相互評価を行ないその結果を、次のような表に、月ごとに記入しておく。

児童名	4月	5月	6月	7月
健吉	B 3	C 2	A 4	A

そして、年度のおわりに2図のようにまとめる。(図2)は、児童ひとりひとりの年度の評価である。これを、学級・学年としてあるいは学校としてまとめ、いかにして年度の重点目標の評価にするかについては、多くの問題点がある。4項で述べることにする。



(図2) 年度の発表能力・態度の評価

#### 4 まとめ

年度の重点目標の評価をめざした学級での実践の一部を述べたが、数量化することは質的なものを量的なものにかえるくふうであるといってもよい。しかし、なにからなにまで数量化することは不可能なことである。これは、具体的作業(目標の具体化, 評価項目・観点の設定, 数量化)が不可能であるということと、反面、数量化することがすなわち正確ともいえないことを含んでいる。人間が人間を評価し、組織体としての教育活動の評価するのであるから、万全というわけにいかないのは理の自然である。ひとりひとりの児童を評価し、個人 → 学級 → 学年 → 学校の評価まで進めるには、教師の児童を観る目・考え方(評価), 児童相互の見方・考え方(評価)が、ときには当を得ていることもありうるのである。

数量的に評価することは、数量的に評価可能な部分だけを評価するのであるから、これらのトータルが全体の評価(重点目標の評価)にはならない。そこで、このマイナス面を補うために、教師の教育観・児童観から出た意見をもとに、自由に討議することも必要である。客観的な評価をする際の補充事項留意事項を考えておかねばならない。

#### IV 反省と今後の問題点

評価について研究する場合、まずもってしなければならないことは、評価対象の分析である。態度を評価するには「態度とは何か」から考究されねばならない。この点について、かなりの不足があったと反省している。

今後の問題点としては、教育目標の具現化、活動内容の明確化、評価項目・観点の客観化をさらに押し進めなければならないであろうし、また、客観的評価・評価の数量化を補うものとして何がよいか、充分検討されねばならない。いま一つは、評定尺度の重要性について、改めて認識し、吟味された評定尺度を作ることであろう。

#### 文献

- 1) 林部一二: 学校経営の評価と改善, 学校経営 9月号臨時増刊 (1967) P 157
- 2) 橋本重治: 教育評価法総説, 金子書房 (1971) P 74
- 3) 2) と同書 P 37

#### その他の主な文献

- 牛島義友ほか: 行動・性格・道徳性の評価, 講座 教育評価 4巻, 明治図書 (1969)
- 全国教育研究所連盟: 学校経営の構造と機能 (1971)
- 新潟県教育庁指導課: 生活指導資料第5集 (1971)
- 林 協: 学校教育目標の具体化の方法, 教育経営, 4月号 (1969)
- 増田米治ほか: 学校の経営改革—原則・手順・様式・事例—東洋館 (1964)
- 宮田丈夫: 学校目標の学級実現化, 新光閣書店 (1970)
- 大和市教育研究所: 教育評価について (1970)